

第二十九回 月山富田城(その2)

～我に七難八苦を……戦前のヒーロー登場～

山本 忠博

前々回は、第一次月山富田城の戦いまでを書きました。今回は、第二次月山富田城の戦いによる、この城の落城と尼子家の没落、そして、尼子再興軍によるこの城の奪還運動までを書くことにします。主な登場人物は、月山富田城を囲んで、それを手中にした毛利元就と、落城後も毛利家に楯突いて、尼子再興軍の実質的な指揮をとった山中鹿介です。鹿介といえば、戦前は教科書に載るくらいに有名だった人で、「我に七難八苦を……」と月に祈ったとされる不撓不屈の尼子家々臣ですが、さて、彼は城を奪還できたのでしょうか。

毛利氏と尼子氏の中国地方争覇戦

今回は、周防(山口県)の大内氏による出雲(島根県)の尼子氏への攻撃(第一次月山富田城の戦い)が失敗し、尼子晴久の勢力が急速に回復、拡大する一方で、大内氏に代わって安芸(広島県)の毛利元就が躍進する頃から話を始めましょう。

この時期の尼子家と毛利家に起きた出来事を時系列に並べると、

- ①尼子晴久が大内氏との第一次月山富田城の戦い(1542年)に勝利して急速に失地回復
- ②尼子晴久を室町幕府が山陰山陽八ヶ国の守護に任命(1552年)
- ③毛利元就が大内氏との厳島合戦(1555年)に勝利して大内氏領を急速に浸食
- ④毛利元就によって大内氏が滅亡(1557年)

と、いうことになります。その結果として、中国地方は、南西部を押さえた毛利元就と、北東部に勢力を張る尼子晴久の二強対決に移行します。

元就が尼子氏との戦いで重要視したのは旧大内領の石見銀山(島根県の世界遺産)の確保で、そのために、晴久と

の争奪戦(1556年)と、それに続く奪取作戦(1559年)を試みますが、いずれも手痛い敗北を味わっています。晴久の立場からすると、機をみて石見銀山を確保し、その後も毛利軍を追い返したわけで、してやったりというところでしょう。晴久については、後世において悪評が目立ちますが、これは尼子家が最終的に滅びた故の結果論であって、生前の彼は元就と渡り合っており、けして暗君ではなかったと見るべきです。もし彼に責められることがあるとすれば、それは領内の支配体制を完成させる前に急死したことでしょう。1561年のことで、晴久が47才の時でした。

第二次月山富田城の戦いの前

晴久の死によって尼子家の家督は息子の義久が継承しました。しかし、先代の晴久の死は、尼子宗家への権力集約のために内部粛正等を行っていた途上のことで、動揺の收拾がついていないところに更なる動揺を招く結果となり、尼子家の勢力は減退し始めます。

家中の動揺を収めたい義久は、元就に対して和睦を申し出て、毛利側に圧倒的に有利な内容で和議を結んでしまいます(1561年)。この和議の項目に尼子方の石見方面への不干渉があったため、尼子方で石見の攻撃を担っていた国人領主が立場を無くして失望し、毛利方に寝返ってしまいます。そして、石見での形勢を完全に逆転した元就は、和議を締結した翌年には早々とこれを反故にし、いよいよ出雲に向けて遠征を開始しました。

第二次月山富田城の戦い

月山富田城には尼子十旗と呼ばれる堅固な支城群が在り、元就の1562年の来攻時においてもそのうちのいくつかは強固な護りを維持していました。元就は、これらの支城の攻略から手を付け、確実に本城である月山富田城への補給線を遮断していきました。その後の元就による月山富



田城の包囲は長期にわたり、1565年の春になってようやく本格的な総攻撃を試みますが、そこは難攻不落の月山富田城ですから、城兵の士気が旺盛なこともあって、元就の攻撃を跳ね返してしまいます。これに対して元就は、再び徹底した兵糧攻めに転向します。そして、後世において謀神とまで称される彼ですから、城内の兵糧を早く尽きさせるために、しっかりと手をうちます。

元就の兵糧攻めは確実に尼子方将兵の士気を奪い投降者が始まりますが、元就はこれを許さず、見せしめの処刑を行って尼子方将兵を城から出るに出不る状況に追い込みます。これによって城内の人員の数は減らず、兵糧は急速に不足していくことになりました。そして、元就は、城内の兵糧がほぼ尽きたと判断するや一転して投降を許し、高札を立ててこれを城中に知らせたため投降者が続出し、ついには尼子家譜代の家臣まで投降するに至ります。さらに、城内では、義久が奸臣の讒言を信じて忠臣を殺してしまうという一件があり、士気の低下は免れようがありませんでした。この殺された忠臣が、私費を投じて兵糧を城内に入れ、将兵に分け与えていたのですから、義久の命運も尽きたというべきでしょう。

こうして、1566年の冬に義久は降伏し、月山富田城は開城されました。ちなみに、元就は義久を幽閉しますが、命は保証しています。

山中鹿介の尼子再興運動～1回目～

山中鹿介は、尼子家の庶流の出で、若くして武勇を示していた尼子家の家臣です。彼は、毛利との戦いの中で、月に向かって「願わくば我に七難八苦を与えたまえ」（自分を試すために敢えて苦勞を与えてください）と祈ったという人物ですが、主君の義久が元就に降伏したため、月山富田城の戦い後は浪人の身となっていました。しかし、ここから彼の尼子家再興に賭けた執念の戦いが始まります。そして、ほんとうに苦勞続きの人生になります。

鹿介は、1568年の24才のときに、京都で出家していた尼子一族の勝久を担ぎ出して尼子再興軍の旗頭とします。彼等は、まず隠岐の島に渡り、そこから島の豪族の力を借りて出雲に上陸を果たし（1569年）、さらに尼子遺臣の勢力を吸収しながら出雲の大半を支配下に収めていき、ついには、月山富田城を囲むこととなります。しかし、配下の統制が長くは維持できず、島の豪族の離反を招き、そのうえ、本格的に攻撃に転じてきた毛利軍に敗北をきたしたため（1570年）、勢力の減退が著しく、けっきょく、鹿介は毛利方に捕らえられてしまいます。それでも、鹿介は脱出に成功し、今度は織田信長のところに向かいました。ちなみに、これより少し前に毛利元就は死去しています。

鹿介は、1568年の24才のときに、京都で出家していた尼子一族の勝久を担ぎ出して尼子再興軍の旗頭とします。彼等は、まず隠岐の島に渡り、そこから島の豪族の力を借りて出雲に上陸を果たし（1569年）、さらに尼子遺臣の勢力を吸収しながら出雲の大半を支配下に収めていき、ついには、月山富田城を囲むこととなります。しかし、配下の統制が長くは維持できず、島の豪族の離反を招き、そのうえ、本格的に攻撃に転じてきた毛利軍に敗北をきたしたため（1570年）、勢力の減退が著しく、けっきょく、鹿介は毛利方に捕らえられてしまいます。それでも、鹿介は脱出に成功し、今度は織田信長のところに向かいました。ちなみに、これより少し前に毛利元就は死去しています。

尼子再興運動～2回目・3回目～

鹿介は、信長に中国攻めの先方になることを誓い、親信長派の武将の協力の下で因幡（鳥取県）に攻め込み（1572年）、一時的とはいえ東因幡一円を支配下に置くことに成功しました。しかし、親信長派だった武将が、毛利氏と信長の間に挟まれて立場をころころ変え、けっきょく毛利氏と手を結んでしまったことから、尼子再興軍は孤立してしまいます。その後も鹿介達は奮闘を続けますが、頼りの信長からはろくな支援も受けられず、ついには、因幡から退去することになりました（1576年）。

その後は、信長配下の明智光秀の軍に加わり、しばらくは毛利氏との戦いから離れますが、羽柴秀吉が播磨（兵庫県）の攻略を開始すると、その軍と共に対毛利戦の最前線に再び立つこととなります。鹿介達は、秀吉軍が攻略した上月城に籠もって、ここから周囲の調略を始めます。しかし、信長方だった同じ播磨の三木城が反旗をひるがえしたため、秀吉軍はそちらの鎮圧で手一杯になり、この機に乗じた毛利勢に上月城を包囲されてしまいます（1578年）。

こうなると多勢に無勢で、鹿介達は為す術なく、兵糧が尽きたところで毛利軍に降伏をしました。その処置として、尼子勝久は切腹し、鹿介は捕らえられたうえ移送途中の備中（岡山県）で殺害されました。1578年、34才のときでした。こうして、毛利氏に抗い続けた鹿介の死をもって、尼子再興軍の活動は終焉を迎えることとなります。

月山富田城のその後

これだけの人物が入り乱れて歴史を刻んだ月山富田城ですが、江戸幕藩体制の開始にともなって廃城となりました。

1934年に国の史跡に指定され、現在はハイキングコースも整備されていますから、軽い登山気分ですら山の上の本丸まで登ってみると良いでしょう。